

— 綽約の杜 弐 —



成人指定  
**R18**  
未成年の購入  
閲覧禁止

■こんにちは川邑司です。  
緊縛巫女さん本 2冊目です  
今回は人気の高かった巫女長を  
多めに描いてみました。  
ごゆるりとお楽しみ下さい。



ある日一枚の  
葉書が届いた

丁寧な書かれた  
綺麗な文字で  
季節の挨拶と

が春から初夏の香りよ  
んてくるのを感じる季節  
はやかにお暮らしの  
存じます

貴方様に私共の  
伝いをお願いしたく  
執らせて頂きました  
心がよろしければ  
もお越しただけ  
してまいります

「お待ちして  
おります」と  
いう一文

差出人は  
地方にある神社で  
願いのよく叶う  
大変に御利益の  
ある事で有名らしい

一年前とある縁で  
お世話にな  
った事がある

その時に  
御利益を見  
ないや関  
わること

出迎えてくれたのは  
前回お世話になった  
変わらぬ  
凛とした佇まいの  
巫女長だった

これからの数日間  
前と同じ驚きか  
待っているかと  
思うと  
胸が高鳴る

この神社は  
神楽舞と同じ様に  
「心」を奉納する

それも強い  
恥じらいの心であれば  
ご利益は高くなる

何代か前の宮司が  
そういう趣味の人であり  
戯れに巫女を緊縛をした所  
次々と願掛けが  
成就したらしく  
以来密かに続いている

前回来た時に  
説明してもらった事は  
つまり自分の役目は  
その羞恥の心を  
引き出す「観客」だ

縛られている巫女は  
触ることの叶わない  
「供物」なので  
気を付けなければ  
いけない

到着した日はすでに  
一人縛られていた

前回初めての  
お勤めを  
一緒に過ごした  
巫女さんだ

腕を上げた状態なので  
形の良い胸が  
縄の締め付けで  
浮き彫りにされ  
なんとも  
言えない様相だ

次の日居たのは  
巫女長だった

縛られていても  
背筋の伸ばし  
真白い太ももを  
晒した姿は  
淫靡というよりも  
美麗だ

巫女長がお勤めをすると  
ご利益が格段に変わると  
他の巫女から  
前回聞いたが  
なるほど納得だ

この巫女さんは  
前回かなりキツイ  
お勤めをしていた  
巫女さんだ

羞恥の心は  
慣れて薄まって  
しまうもの

その都度縛り方は  
変わっていくとは  
聞いていたが  
今はそれほど  
無いように見える

この姿勢だと  
熟れた果実のよう  
大きな胸がぶらりと  
垂れ下がって  
素晴らしい眺めだ

翌日は  
前回お漏らしたの  
場面にお遭ったの  
巫女さんだったの

少し髪が伸びて  
大人びた様に見える

縛られる事に  
慣れてきたのか  
前は見ることも  
なかった  
乳房はとも  
綺麗だ

その日  
お勤めの部屋に  
入る前から  
衣擦れの音と  
押し殺した声が  
聞こえてくる

そっと入ってみると  
例のキツイお勤めをした  
巫女さんが  
秘部に食い込んだ縄で  
自慰をしていた…


やはりもう普通の  
お勤めでは  
物足りないのだろうか？

一向に気づかないので  
軽く咳払いをしたら  
あまりの  
恥ずかしさからか  
倒れてしまった：

必死に秘部から流れる  
愛液を隠そうと  
しているが丸見えだ

お勤め中に巫女さんが  
自慰をしているのかが  
どうかは分からないが

今回の祈願は  
間違いなく成就する  
予感がする



ある日  
お勤め部屋に行くと  
巫女長が  
普通に立っていた

大抵は縛られた状態で  
待っているのだから  
今日はお休みかと  
残念に思ってしまった

そう思った矢先  
巫女長が突然緋袴を  
たくし上げた

そこには  
下着の代わりに  
一本の縄が  
覗いている

かつて見たことのない  
巫女長の顔に  
こちらも  
戸惑ってしまおう

以前屋外で  
お勤めの際  
白衣を開いて  
胸を見せ  
もらった  
事があるが

室内とはいえ  
自ら秘所を  
曝け出すというの  
は  
相当な抵抗が  
あるのだろう…

巫女長の紅潮した顔と  
同じくらい赤らんだ  
秘所を見比べ  
満ち足りた時間を  
過ごす事が出来た

先日自慰を  
目撃してしまった  
巫女さんが居た

羞恥心の限界を  
超えてしまったのか  
縛られているとはいえ  
閉じれる脚を閉じずに  
まるで見せつける  
かの如く広げている

少し心配してしまっただが  
目をそらし  
わずかに紅潮している  
頬を見ると  
これが彼女なりの  
お勤めなのだとな得した

今日の巫女さんは  
絶妙な高さで  
縛り上げられていた

まくられた緋袴から  
少しだけお尻が見え

そして股間に伸びる  
縄の具合がいいのか  
明らかに愛液が  
滴っている


自分が後ろから  
見られた時  
どうなっているのか  
気になるのか  
チラチラとこちらを  
伺う視線が愛おしい

部屋に行くとお勤めを  
巫女長がしたのだ  
股間を通す縄に  
面食らった

少しでも  
動けば  
快感が訪れるだろうに

自分が見ているから  
我慢しているの  
お勤め中に  
そういう事をしない  
主義なのか  
巫女長は微動だにしないが

額に珠のような汗を  
浮かべて  
耐えている姿を見ると  
「遠慮なくどうぞ」と  
言いたくなってしまう…



終わりの日  
巫女長が見送りを  
してくれたのだが  
他の巫女さん達を  
見かけない

他に居ない  
ということ  
前と同じく  
『お勤め』をしながら  
仕事をしているのか  
聞いてみた

巫女長がそつと  
白衣をずらすと  
きれいな乳房と  
それを飾る縄が見える

別れ際  
「また呼んで欲しい」  
と伝えると  
「その願掛けも  
お勤めしておきます」  
とにこやかに  
応えてくれた

# 綽約の杜 式

「綽約の杜 式」  
2020/02/09 初版発行  
めでいかるカンパニー/川邑司  
post@mcompany.sakura.ne.jp